

説 教

北浜チャーチ  
黒田 禎一郎

2021年1月31日（日）

主 題：「苦難さえも喜んでいます。」

—使徒ペテロ—

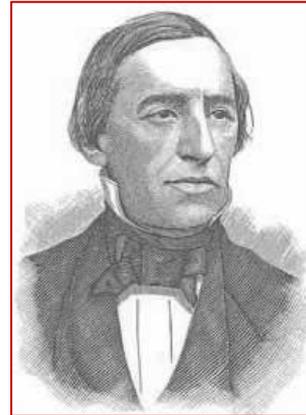
テキスト：1 ペテロの手紙3章17節

### はじめに

- ・ただいま、大都市11都府県においては「緊急事態宣言」のただ中にあります。大阪もその一つで、そのため私たちはさまざまな苦難を味わっています。世界的拡散がみられるコロナパンデミックとの戦いは、まだまだ続きそうです。私たちの願いは、この苦しみに勝ち、コロナ感染症が速やかに収束することです。
  - ・ところで私たちは遭遇する苦難をどう受け止め、どのように生きるべきでしょうか。人生には必ず苦しみがあります。そこで私たちは、先人が残してくれた歴史から学ぶことができます。
  - ・{例 話}
- 19世紀のはじめに作られた讃美歌380番「たてよ、いざたて」の作詞者 George Duffield(ジョージ・ダフフィールド)牧師を考えてみましょう。この曲は勇ましく、軍隊調で、まるで讃美歌とは異なるような印象を受けやすいと思います。「たてよ、いざたて」の詩歌は、いったいどのようにして生まれたのでしょうか。それは次のようなストーリーです。
- ・19世紀初頭の米国は、霊的に大変祝福された時代でした。リバイバリストの一人に聖公会のダッドレー・A・テイング (Dudley. A. Tyng) 師がいました。彼がペンシルバニア州・フィラデルフィアで大伝道集会を開催したとき、なんと5千人もの会衆を集めました。そしてこの大会で1千人ほどが信仰決心するという、リバイバル(霊的覚醒) が起こりました。
  - ・当時の彼は若干29歳という青年でした。彼は歴史に残るリバイバリストで、熱い信仰をもって、教派を越えて多くの人々をイエス・キリストの救いに導いた神の器でした。
  - ・ところが、この若き伝道者ダッドレー・A・テイング師に思わぬ災難がふりかかりました。それは大伝道集会が開かれ、多数の信仰決心者が起こされた3日後の朝、テイング師はしばらくの気分転換を求めて、書斎を出て納屋へ行き



ました。そこでは「らば」が、トウモロコシを脱穀して  
いました。彼は「らば」に近づき「らば」の首をや  
さしくなでている内に、彼が着ていた書齋着の袖が脱  
穀機の歯車に巻き込まれてしまいました。



- あっという間に、彼の片腕はその歯車にとられてしま  
い、無惨にも腕は根元からもぎ取られてしまいました。  
大量に出血し重傷状態に落ち入りました。臨終の知ら  
せを聞いた家族や友人たちが集まりました。友人の一  
人が、医師から彼の死が迫っていることを聞きました。
- そこにいたテイング師の父親は息子の最後を見守り、  
静かに「何か言い残すことはないか？」と尋ねました。テイング師は目を大き  
く開いて、「お父さん、私と一緒に神のために働いてくださった牧師たちや、  
YMCA の方々へ伝えてください。「Stand up, stand up for Jesus」(立ち上  
がりなさい、イエスのために立ち上がりなさい)と。彼はそう言い終えると、息  
絶えて召されてしまいました。

- 皆さん。まだまだ若い有能な伝道者であったテイング師の召天は、当時大ニュー  
ースとなりました。神はなぜ、このような不幸をお許しになられたのでしょ  
うか。
- なぜ、このような苦難が賜物豊かな若い伝道者に及んだのでしょうか。疑問  
に思うことが多くあります。しかし私たちにその意味が分かりませんが、神  
には決して偶然はありません。聖書は次のように勧めています。

#### 1 ペテロの手紙3章

3:17 神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って  
苦しみを受けるほうがよいのです。

- つまり聖書は、苦しみは人生にあることを前提としていることです。  
苦しみがない人はいません。苦難がない人もいません。苦難の大小の違いは  
あるにしても、みな苦しみはあります。当時のユダヤ人クリスチャンは、命  
の危険という大きな苦難の中で生活していました。この書簡（1ペテロの手  
紙）は、苦難下にあったユダヤ人キリスト者に書かれたものでした。
- 時代は違い情勢は異なりますが、現在はコロナパンデミックという大きな苦  
難に遭遇しています。世界の感染者数はやがて1億人に達するであろうと、  
専門家は語っています。毎日、新感染者が出て、毎日死者が出ています。欧  
州の国々では、ロックダウン（都市封鎖）、外出禁止令が出ています。
- これは決して他人ごとではありません。私たちはその大きな苦難の中で、ど

のように生きれば良いでしょうか。 2点

### 大切なポイント

#### 1. 聖書の教え

3:17 神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。

##### 1) 良いことに熱心でありなさい

- ・私たちが心がけることとしては、良いことを行うことです。これが苦難下にある人への勧めです。人が喜ぶこと、人の益となることです。他人を押しつけても生きようとする時代に逆説ですね。聖書は次のように述べています。  
3:13 もしあなたがたが良いことに対して熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。

- ・私たちは良いこと（善）に思いを向けることです。当時のユダヤ人の伝統的考えは、「善」を行うこと（施し）にありました。福音書を開きますと、ある時イエスのもとにある金持ちが近づいてきて、このような質問をしました。マタイ福音書19章

19:16 「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」

- ・彼の目の置き所は「良いこと」（行動）にありました。しかしこの人はイエスが示された「良いこと」（律法）を実践できず、悲しながら立ち去りました。「良いこと」、それは人が喜ぶことです。しかし、その「良いこと」を行うには、出来ないという壁がありました。

##### ① 「恐れ、おびえ」の壁

- ・人には「良いこと」を行う力がないのです。聖書は「もしあなたがたが良いことに対して熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。」(3:13) と述べています。しかし、良いことを行う力がありません。
- ・世の中で、「良いこと」は分かっている、自分の内にはその力がないために、「恐れ、おびえ」を持つことがあります。苦難に勝つにはそれに優る力が必要です。
- ・そこで幸いなことは、「良いこと」を行う力を持つことができることです。それは、一人で頑張るのではなく、イエスがともにいてくださることです。

##### ② イエスのくびき

- ・マタイ福音書11章

11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。

- ここが大切なポイントです。キリスト者は苦難に会う時、頑張るのではありません。イエスがくびきを負ってくださいます。この聖句に注目ください。「**わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。**」つまり、イエスと同じくびきを負うことです。
- 別の見方をすれば、イエスは「**わたしのくびき**」と言われたことです。苦難に会うとき、それは私（黒田）の苦しみですが、イエスが「**わたしのくびき**」と言ってくださることです。なんということでしょうか。
- 私たちは苦難に出会うと、自力でなんとかしようとするのではないのでしょうか。私たちの主であるイエス・キリストは、私たちの苦難を負ってくださいます。なんという幸いではありませんか。
- イエスのくびきを、私が共に負うならば、そこで神が事をなしてくださいます。ペテロは次のように言いました。

3:16 **ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしっている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じるでしょう。**

- ここに苦難にあっても生きる、幸いな道があります。当時、苦難下にあったユダヤ人キリスト者に対し、良いことに熱心でありなさい、と勧めました。**恐れ、おびえがあっても大丈夫。イエスのくびきを共にすれば、苦難に勝つことができます。**
- **なぜなら、イエスこそ十字架の苦難を受け入れ、殺され、墓に葬られました。しかし復活によっての力ある勝利をされたお方です。イエスは死に打ち勝った勝利者です。そのお方とくびきを共にできることは、なんという力ではありませんか。ここに、苦難があっても生きる力を得る生き方があります。**

## 2. 苦難さえも喜ぶ信仰

3:17 **神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。**

- ペテロは、キリスト者は苦難さえも喜ぶことができると説きました。

### 1) 神のみこころ

- まず「**神のみこころであるなら**」と述べています。苦難には神が許されることがあることがわかります。いいえ、すべての苦難は神が許されて起こりま

す。問題はみこころであるかどうかです。たとえ自分には苦難を喜べないことでも、神が許されて起こる苦難ならば、そこに神がご臨在くださいます。

- では、どうすれば良いでしょうか。⇒ 正直に、神に祈ることです。イエスのくびきを負うことです。そうすれば神はその祈りに耳を傾けてくださり、お聞きくださいます。すると、そこで何かが起こり始めます。

## 2) 神のご計画

- 神が許される苦しみには神の計画があります。

{例 話}

- はじめにお話した Dudley・A・Tyng(ダットレー・テイング)師のストーリーです。テイング師の劇的な臨終に立ち会っていたのが、親友ジョージ・ダフィールド牧師でした。彼はテイング師が臨終の床で語った言葉、“Stand up, stand up for Jesus” を聞き、心に残りました。
- ダフィールド牧師は、その言葉からすぐ詩を書きました。そしてその次の礼拝において、親友ダットレー・テイング師の追悼礼拝を持ちました。多くの人々が不慮な事故で召された故人を偲び、深い悲しみに沈んでいました。説教のクライマックスのところで、彼は” Stand up, stand up for Jesus” (立ち上がれ、イエスのために立ち上がれ)を引用しました。
- とところで、若きリバイバリスト Dudley・A・Tyng(ダットレ・テイング)師のエピソードは、さらに続きます。彼はわずか29歳で天へ召されました。しかし彼の息子 T. S. テイングは、その後宣教師として何と日本にまで来ていたのでした。
- 1866年、T. S. テイング宣教師は明治維新の初め頃、来日し尊い働きをしました。テイング宣教師が洗礼を施したのは、元田作之進という人でした。彼はその後、召命を受け献身し牧師となりました。
- 皆様もご存じの日本を代表する音楽家の一人に、「荒城の月」などの名曲で知られた滝廉太郎がいました。その滝廉太郎は東京の聖公会「聖愛教会」で1900年10月7日、元田作之進牧師から洗礼を受けていました。
- 滝廉太郎は教会でオルガニストをしていました。その後元田作之進牧師は、聖公会で最初の日本人監督主教となられた方です。そして1907年、立教大学初代学長になられた人でした。
- 元田作之進牧師は知的に鋭く、統率力においても優れた方でした。キリスト教徒らしい愛に満ちた心を持つ、まれにみる人物であったと言われます。彼に出会った滝廉太郎は、恩師からどれほど大きな感化を受けたか容易に想像できます。それは彼の作品にも現れていると思います。
- その元田作之進牧師の運命を大きく変えたのは、米国聖公会から派遣された

T. S. ティング宣教師との出会いです。不慮の事故で命を失ったダッドレイ・ティング牧師の息子でした。彼は父の言葉 ” Stand up, stand up for Jesus” (立ち上がれイエスのために立ち上がれ)を受けて、文字どおり立ち上がりました。そして、日本にまで宣教師となり来られたのでした。このように神の不思議なご計画がありました。

- 神が許されて起こる苦難には、神のご計画があります。苦しみには、神のご計画がありました。神のみこころには、もう一つ幸いがあります。

### 3) 神の約束

3:17 神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。

- ペテロはここで、「善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。」と述べました。日本語訳聖書（新改訳2017年版）では、単に「よいのです。」(ギリシャ語:kreitton:クレイトン or クライトン)とありますが、この語に2つの意味が込められます。

① 「善」、「良いこと」で他より優っていること (英語の better)

② 「強力で力が満ち溢れ、効果的である」

- 「kreitton:クレイトン」という語には、この2点が含まれます。「善を行って苦しみを受ける」とは、それほど大きな(他より優り、強力で力が満ち溢れる)「生き方」となるのです。
- なぜでしょうか。それはそこに「神の国」が現れるからです。しかも自力ではありません。イエスのくびきを負う者には、イエスが栄光を現し「神の国」を現してくださるからです。それは神を信じるキリスト者の特権です。
- ですから、神を信じるキリスト者は苦難さえ喜ぶことができます。そしてその神の国は、やがて御国に入るまで続くものです。ハレルヤ!

### ま と め

主 題：「苦難さえも喜んでいきます。」

—使徒ペテロ—

- 今日、私たちは苦難の下にある生き方について学びました。ペテロは、キリスト者への大迫害が起こった当時、苦難さえも喜ぶ信仰を持っていました。その喜びは天の御国に向う生き方から来ました。彼は「善を行って苦しみを受けるほうがよい」という生き方を教えました。そこには「神の国」が実現します。
- 同じく現代のキリスト者にも苦しみはあっても、やがて「神の国」に入る約

東が与えられています。「神の国」は、今ここから始まります。私たちがみことばを实践するならば、そこから「神の国」が始まります。それは神の「恵み」です。

- では苦難、苦しみ中に置かれて、私たちはどう生きるべきでしょうか。  
3:17 神のみこころであるなら、悪を行って苦しみを受けるより、善を行って苦しみを受けるほうがよいのです。  
ここに、私たちの生き方があります。それには、マタイ福音書11章にあるように、イエスとくびきを共にし、イエスから学ぶことが大切です。

11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。

\* God bless you!